

## ゲルノート・ベーメの自然美学の射程

—「美しい自然が善い自然とは限らない」をめぐって

阿部美由起 (玉川大学)

---

ゲルノート・ベーメは『雰囲気』(1991, 2013)、『感覚学としての美学』(2001)などにおいて「雰囲気」を根本概念とする、感性論としての美学を提唱したことで知られる。その一方で、エコロジーに対する社会的関心の高まりを受け、主に1980年代以降「自然とはなにか」という極めて古典的な問いに関する論考を多く手掛けている。本発表では、その代表的な成果のひとつである『エコロジー的自然美学のために』(1989)および関連論考に拠り、ベーメの自然認識を確認した上で、マルティン・ゼールによる『自然美学』(1991)を参照軸とし、ベーメの自然美学の特異性と意義を究明する。

ベーメは、現代において「美しい自然が善い自然とは限らない」とし、自然の自明性が解体された現実を指摘する。ベーメの自然美学においては「美しさ」は除外され、人間によって「破壊されつくされた自然」が考察の主な対象となる。また、このような自然は、人間によって「保護」されるだけでは間に合わず「形成」されなければならないという基本的見解をとる。

人間による自然への積極的介入を認めるベーメの自然美学に対し、ゼールは批判的見解を示す。自然美学を「善き生の倫理学」に至るための過程と捉え、自然を善と美のもとに認識するゼールは、破壊された自然に焦点を絞るベーメの論考について、自然を「半分しか見ていない」と指摘する。たしかにベーメの自然美学は、ゼールのように「観照」「照応」「想像」という美的態度のもとに、観者にとって自然と看做されるあらゆる自然を俯瞰的に捉えるのではない。身体的・直接的レベルにおいて人間の自然との関係を捉えるがゆえに、それは限定的であり、美的な理論としての偏りも指摘できる。しかしベーメの、人間による積極的な自然の形成理論は、実際に今日、世界各地でみられる自然環境の再生プロジェクトと連関付けることができるし、古典的な意味での「制作」の領域に関わっている点において、理論と実践の境界に位置付けることもできよう。結論として、ベーメの自然美学は、美学理論の系譜において伝統的な自然概念を素通りするがゆえに“異端”ではあるが、現代のわれわれの自然認識と符合する“新しい美学”のプロジェクトとして意義づけることができる。